

日本語が不得意な児童に対するタブレット端末を用いた支援の研究

Research about Support by using Tablet PC
for An Elementary School Student who is beginner in Japanese花野井 佑^{*1}, 北澤 武^{*2}Yu HANANOI^{*1}, Takeshi KITAZAWA^{*2}^{*1} 東京学芸大学教育学部^{*1} Faculty of Education, Tokyo Gakugei University^{*2} 東京学芸大学情報科学分野^{*2} Department of Technology and Information Science, Tokyo Gakugei University

Email: a141417g@st.u-gakugei.ac.jp

あらまし：本研究では、日本語が不得意な児童を対象にタブレット端末を貸与し、コミュニケーション能力や学習意欲、日本語の識字能力にどのような影響をもたらすかについて参与観察し、インタビューなどの質的研究法で分析した。結果、当該児童がタブレット端末で写真や動画を撮影し、他の児童とこれを共有することは、コミュニケーション能力の向上と学習意欲を高める上で有効であることが分かった。

キーワード：日本語が不得意、タブレット、コミュニケーション能力、学習意欲、識字能力

1. はじめに

保護者が外国籍のために日本語が不得意である子どもの人数が増加しており、各学校ではこのような子供に対する日本語指導、教科指導、生活指導の充実を図ることが急務となっている⁽¹⁾。また、日本語が不得意である子供の問題として日本語で説明されている授業内容が理解できないために学習困難となったり、日本語による友達との対話が難しいことから社会不適合となったりすることが挙げられる⁽²⁾。しかしながら、タブレット端末を通常学級の子供に聞き手への支援、考えを深めることへの支援として活用したりしたところ、相互にコミュニケーションをとりながら自分の考えを深め合う様子がみられたと示されている⁽³⁾。さらに子供に学習意欲を高めるには、日本語でも、英語でも、人と関わり積極的にコミュニケーションする能力を育てることが大切であると示されている⁽⁴⁾。

そこで本研究では、日本語が不得意である児童を対象に、担任の指導の下、タブレット端末を提供した。そして、これを介しながらコミュニケーション能力や学習意欲、日本語の識字能力にどのような影響をもたらすかについて、参与観察による質的研究法を採用しながら分析することを目的とする。

2. 調査概要

2.1 対象

都内公立小学校3年生の男子児童（中国籍）1名を対象に参与観察を行った。日本在住歴は約5年であるが両親は日本語を話すことができず、家庭での日本語による会話はない環境であったため、日本語が不得意であった。2年時における、当該児童の学校での様子は、以下であった。

- ・ 授業に集中せず日本語を覚えようとしなない。
- ・ 自力で日本語の文章を書くことはできない。

- ・ 同級生の児童とトラブルがあった際に言葉が通じず、すぐに手を出してしまう。
- ・ 教室の端に1人でいることが多かった。

2.2 時期

2016年4月から1年間、当該児童にタブレット端末（iPad（第4世代））を貸与し、2016年5月から2017年3月までの11ヶ月、授業中に児童がタブレット端末を利用する場面を観察した。参与観察は計14回、32時間行った。

2.3 分析方法

本研究は質的研究法を用いて行った。本研究では対象児童の友達とのコミュニケーションの変化、学習意欲の向上、識字能力の変化の観点について、参与観察、および対象児童とその同級生、担任、担任以外の教員へのインタビューで質的分析を行った。

3. 実践事例

3.1 事例1

友達とコミュニケーションを図るために、カメラ機能を使い同級生のクラスの子の発表や理科の観察の様子をタブレット端末で撮影し、共有することを試みた。10月頃から自主的にカメラ機能を使用し始める様子が見られた。

3.2 事例2

学習意欲を高めるために漢字学習アプリやインターネットを使用し、調べ学習をする学習活動を試みた。漢字学習アプリでは同級生と一緒に学ぶ様子が見られた。

3.3 事例3

識字能力を高めるために、翻訳アプリの使用や、板書を撮影して自分のペースでノートをとる活動を試みた。最初はノートをとらなかつた当該児童が

徐々にノートをとるようになっていった。

4. 結果と考察

4.1 児童へのインタビュー

タブレット端末を利用して改善したことを当該児童にインタビューした結果、以下の回答が得られた。

A：iPadを使った勉強はどうだった？
 B：たくさん勉強できた。楽しかった。
 A：漢字アプリは使った？
 B：うん、使ったよ。たくさん漢字を勉強できた。
 A：(漢字学習アプリを)友達と使っていたよね？
 B：うん、一緒に勉強した。(A：質問者 B：児童)

以上より、当該児童は漢字アプリを使用して友達と一緒に漢字を勉強できたと認識していた。友達と漢字学習アプリを使用することが、学習意欲とコミュニケーションの向上の点で有効と考える。

4.2 担任へのインタビュー

当該児童のコミュニケーション、学習意欲、識字能力について、担任から、以下の回答が得られた。

最初は翻訳アプリを使用して言語面の支援を試みたが、当該児童が自主的に使う用途はカメラ機能だった。写真や動画のように言葉以外にもコミュニケーションをとる手立てはあった。

理科の観察の様子や、板書の記録を当該児童に頼んで撮影してもらった。その行為が同級生から感謝されたり、喜ばれたりするようになり、それが当該児童には心地よいものだったように見える。しばらくすると自分の役割として自主的に撮影するようになった。その結果クラスにも居場所ができ授業にも参加するようになった。

担任は、カメラ機能は同級生とコミュニケーションをとるきっかけとなり、コミュニケーション能力の向上に効果があると認識していることが分かった。このことから担任がカメラ機能を活用する場面を与え、写真を共有することが、日本語が不得意な児童のコミュニケーション能力を高めるきっかけになると思われる。

次に、日本語の識字能力に関することについて、以下のような回答が得られた。

友達と会話をたくさん交わすようになったことで、国語の音読に興味、関心をもち始め上達してきた。漢字学習アプリもよく使って学習していた。しかし言葉や文章の理解、漢字を書くことに関しての能力はまだ低い。

上記の回答から、担任は、友達と会話を交わす頻度が増えることで、音読に対する学習意欲が向上すると認識する一方で、漢字学習アプリは日本語の識字能力の向上には効果が出にくいと認識していることが分かった。タブレット端末を用いて日本語の識字能力を高めるためには、友達との関わりながら日

本語を書く場面を設ける必要がある。

また、担任から「日本語を覚えようとしなかった当該児童がiPadを貸していただいたおかげもあり、1年前と比べるととても落ち着いた学校生活が送れるようになった。」と回答を得たことから、当該児童は1年前と比較して同級生と良好な関係を築き、日本語にも前向きで、学校生活が改善されたと担任は認識していることが分かった。加えて、当該児童の保護者から担任を介して「同学級の児童と簡単な交流ができるようになった。」とのコメントを得た。また、同級生にインタビューした結果、「3年生になってから当該児童はとても変わった。優しくなった。」、さらに担任以外の教員からは「顔つきや目つきがとても変わり、穏やかになった。」、「今ではクラスの一人員となっている。」などの回答を得た。担任だけでなく、周囲の人達も当該児童は同級生と良好な関係を築けていると認識していることが分かった。日本語が不得意な児童にタブレット端末を同級生との交流の手段として使えば、コミュニケーションが良好になり、学校生活の改善にも繋がるのが期待できる。

5. まとめ

本研究では、日本語が不得意な児童がタブレット端末で写真や動画を撮影し、他の児童とこれを共有することで、コミュニケーションが良好になり、ひいては、学習意欲の向上と学校生活の改善に繋がるという有効性を明らかにした。

今後の課題として、日本語が不得意な児童の日本語の識字能力を高めるようなタブレット端末の活用方法を追究したり、発達段階や各教科等に応じたタブレット端末の支援方法を検討したりすることが求められる。

付記

本研究は、平成29年度東京学芸大学教育学部初等教育教員養成課程情報教育選修卒業論文「日本語が不得意な児童に対するタブレット端末を用いた支援の研究(花野井佑)」をまとめたものである。

謝辞

本研究にご協力頂いた皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 文部科学省(2016) 学校における外国人児童生徒等に対する教育支援の充実方策について(報告), http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/06/1373387.htm (参照日 2017年2月19日)
- (2) 中西晃, 佐藤群衛(1995) 外国人児童・生徒教育への取り組み, 教育出版, pp.52-54
- (3) 福岡市教育センター 情報教育研究室(2014) コミュニケーション能力を高めるタブレットPC活用の在り方, pp.23-25
- (4) 小林君江(2007) 学ぶ意欲を高める小学校英語—友達と楽しく学ぶ学習活動—, 神奈川県立総合教育センター長期研修員研究報告5, pp.57-60